
罪と罰

ときときと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪と罰

【著者名】

ときときと

【Zマーク】

Z8520Z

【あらすじ】

少年が少女と出会う事により、何かが変わるかもしだなかつた御話。けれど、何も救われなかつた御話。バットエンドが苦手な方は読まないほうがいいと思います。それでも構わないという方は、ちょっとした暇つぶしにでも読んでいただけたら幸いです。

(前書き)

救いなんて欠片もない物語です。
捻くれた作者の性格が滲み出ています。

それでもオーケー、実はバットエンド大好き、むしろ俺の人生バットエンド、という方は、ちょっとした空き時間を潰すためにでも読んでみてください。

そうしたら、私が狂喜乱舞します。

プロローグ

橙色の夕日が山の向こうに消え、夜の帳が辺りを支配していた。暗く静かな通り。

その通りに面して、大きな屋敷があった。この町において、それなりの権力と発言力を持つ者の屋敷。その屋敷の前。

決して豪奢ではなく、だが質素でもない門の前に少年は立つっていた。

薄汚れたボロのような身なりをしており、その手には一振りの剣が握られている。

暗い通りの中、その少年は一人だった。

警戒心もあらわに、少年は当たり見回す。

この場にいつまでも突っ立っている暇はない。

見回りの警団に、いつ見つかるかわかつたものではないのだから。少年は辺りに誰も居ないことを確認して、剣を振り上げる。

そして、一気に振り下ろした。

耳障りな金属音が聞こえ、あっさりと門の南京錠は砕ける。

少年はもう一度辺りを確認し、少しだけ門を開き屋敷の庭に入つた。

そして、迷わず屋敷へ駆ける。

重たい剣を引きずりながら少年は神に祈った。今まで一度も祈つたことのない、信じてさえいなかつた神に。

どうかあの少女が無事で居ますように、と。

少年は少女と出会いによつて、何を知つてしまつたのだろうか

1章 少年

この時代、孤児など珍しいものではなかつた。

貧富の差が激しい格差社会の中、その理由などいろいろもある。そして少年も、そんな孤児の中の一人であつた。

幼くして両親に捨てられた少年は、この町で彷徨つていたところをある集団に拾われた。

その集団は路地裏を根城としている、孤児たちの小さな集まりだった。

少年はそこで仲間と共に、生きるためにひつくりや盜みを繰り返した。

その行動に悪意などない。

少なくとも少年に悪意などなく、罪悪感を抱いたこともないだろう。

少年はただ純粋に、空腹を満たすために、生きるために悪事を重ねていったのだから。

それはどうしようもない事なのだ。

他人を陥れ、犠牲にするしか生きる方法知らず。

善悪も、それに伴う罪悪感も少年は知らないのだから。

もし、それでも少年の行いが罪だと言うなら、それはどのような方法で裁かれ、どのような結末を少年に下すのだろうか。

ある日、少年がいつものように盜みを働き帰る途中。

2章 少女

ある路地裏で、一人の少女と出会った。

白い肌に金髪の自分とは違う、褐色の肌に銀髪の少女。

それはこの世界で、迫害されている一族の証だった。

少女は足を悪くしているのか、片足を引きずりながら壁に手をつきのろのろと歩いている。疲れきった表情だ。

少女の進行方向を塞ぐ様に歩み寄ると、少女は少年に気づき怯えた顔をした。すぐに逃げ出さないとこりを見ると、見た目通りに足が悪いようだ。

少年は辺りを見回す。だが、少女の主らしき人物は見当たらない。ということは、逃げ出してきたのか。または、まだ捕まつた事がなく逃げているのか。

少女の前に立ちふさがり、さて、どうするかと少年は考える。

もちろん、この少女を自身の集団に迎え入れるつもりなどない。集団は大きければ大きいほど捕まりやすいし、集団内での揉め事も起こりやすい。

ましてや、足の悪い奴など何の役にもたたない。

だから少年が悩んでいるのは、この少女をどこに売り飛ばすか、だつた。

少年の仲間に以前、人身売買でかなりの金を稼いできた奴がいた。なんでも怪我をしていた褐色肌銀髪少女を変態屋敷に連れて行つたところ、高値で買い取つてくれたとのこと。

まったくもつて、今現在の少年に当てはまるシチュエーションである。

悩むまでもなかつた。

さつそく少女の手を引き、変態屋敷に向け歩き出そうとするが、少女が駄々をこねた。

座り込んで、必死の表情で手足をばたつかせ、這つてでも逃げようとする。

その姿を見て少年は、あたりまえか、と思つた。

好き好んで奴隸や玩具になる奴はいない。

誰だつて自由に生きたい。他人の言いなりになる人生など望むわけがないのだ。

「この少女だつてそうであろう。

だが。

そんなことは少年には関係ない。

「ここで暴れまわって、これ以上汚れや怪我を増やされても面倒だ。」
「こは自分が友好的であると偽らなくてはならない。

そのため少年は、盗んできた果物を一つ少女に差し出した。
差し出された果物を見て、少女が目を見開く。

そのまま固まってしまったので、少年は果物を少女の手のひらに乗せた。

さらに少女の目が見開かれる。目の大きな娘である。

食べていいと言つと、少女は少年と果物を10往復ほど見た。そうしてまた、少年を凝視する。

もう一度食べていいと言つと、少女の表情が一変した。
果物を大切そうに胸に抱き、少年の顔を見て
ありがとう

と笑つた。

屈託なく、少年を見て、笑つた。

純粹無垢な笑顔。

その笑顔を見て。

その時、少年の中で、何かが揺れた。

少女の笑顔が、本当に小さな波紋を少年の心に生んだ。

それは少年を少なからず動搖させる。

その波紋を、小さな動搖を、それらを無視するためにそつと屋敷に向かおうとして、果物を頬張つている少女の手を無理やり引き、歩き出そうとした。

べちやつ、と音をたてて少女が転んだ。

足が悪いのを忘れていた。

少年は、転んでも果物は守りきつた少女に感心した。

3章 優しさと罪悪感

少年は苛立っていた。

薄暗い路地裏の地面に倒れこみながら、奥歯を噛み締める。

ただ少女を屋敷に連れて行くだけだった。簡単なことだが、それでも一度根城に戻るべきだったのだ。

当たり前だ。あんな大きな獲物を持つて、一人でうろついていい訳がない。

油断していた、としかいえない。何も考えていないかった。

少年も少女も、表道を堂々と歩けない存在なのだから、路地裏を進んでいくしかない。

ならば当然、他の集団に遭遇する可能性を考慮しなければいけなかつたのだ。

暴力と犯罪で生きている集団は少年の集団だけではない。そんなことも失念していた自分が許せなかつた。

だが、少年を苛立たせている事はそれではない。少年の心をざわつかせている事はそれではない。それは。

少年が暴行を受けているとき。

少年が袋叩きに遭っている、そのとき。

必死に少年を助けようとした 少女の行動。

そして、集団に連れて行かれる時に少年へと向けた 少女の悲しそうな笑顔。

少女の表情が 頭から離れない。

また、心が揺れた。

得体の知れない感情が膨れ上がる。

それらをどうにかしたくて、あまりに苦しくて、少年は血がにじむまで拳を握り締めた。

それでも、おさまつてはくれない。

少女がとつた行動が。

少女が見せた、悲しみを堪えたような笑顔が。

少年の心を縛り付けて離さない。

小さな、本当に小さな波紋だったものが。

大きな、本当に大きな波紋となつて少年の心を揺らしていた。

それが何かは、わからない。

だけど、それによつて何かが変わる気がした。

そしてそれは、もう一度少女に会えれば判る気がした。

少年の在り方を変える何か。

ここで少女を見捨ててしまつたら、それはもう一生判らなくなるだろう。

元々は、金のため売り飛ばすつもりだつた。

だが、もうそんなことはどうでもいい。

少年は決意を固める。

少女が連れて行かれる場所はわかつてゐた。所詮、他の集団も考えることは同じだ。

少女を起こし、気合を入れるため天に叫んだ。

そして。

少女を助け出すために駆けた。

4章 罪と罰

門から屋敷まで、警備の人間は居なかつたが大きな犬が2匹いた。

少年は噛み付かれるのも厭わず、ただ力任せに切り伏せる。

傷が大分痛む。その代わりと言つては何だが屋敷には簡単に侵入できた。

屋敷のドアを壊すまでもなかつた。

犬の鳴き声を不審に思ったのだろう。少年は裏のドアから出てき

た使用者らしき人間を襲い、殺して屋敷に入った。

屋敷内に、警備の者は誰もいなかつた。

きっと、この屋敷の主は自身が他人から恨まれたり、ましてや命を狙われるなど考えもしないのだろう。

稀に、金持ちの人間は、それだけで自分が偉いと思つてしまふ人がいる。

それだけで他人に慕われていると勘違ひしてしまふ人がいる。

この屋敷の主もそういう人種なのだ。

まあ、そんなこと少年にとつてはどうでもいい事なのが。

少年にとつて、この屋敷の主が恨まれていようが慕われていようが関係ない。

少年自身が、恨んでも慕つてもいないのでから。

だから少年は、屋敷の中、少女を探す途中。

屋敷の住人に対する何の感慨も抱かずに、邪魔だからという理由で殺していった。

丸々と太った男性の腹を切り裂いた後、辿り着いたのは大きな部屋だつた。

とても静かな、広い箱庭。

高そうな調度品に、ふかふかのカーペット。

部屋の中央には、天蓋つきのきれいなベッドがある。

そして、そのベッドに少女は居た。

感情の読めない表情で、脱力したように座つてている。

少年は、返り血によつて真つ赤に染まつた様相で、血の滴る剣を引きずりながら近寄つた。

少年に気づいたのか、少女が顔を上げる。

それから少年を見て、少女は微笑みケラケラと、カタカタと笑い出した。

笑いにあわして斯く斯くと動く少女の頭を見ながら、少年は静かに立ち尽くす。

少女の目は少年など見ていなかつた。そもそも焦点が合つていな

い。

ただ虚空を見つめながら、笑い続けている。
ケラケラと、カタカタと笑い続けている。

少年は思つ。

間に合わなかつた と。

少女は狂つていた。

どうしようもなく、終わつていた。

心がざわつく。感情がぐちゃぐちゃになりまとまらない。

目の前の事態が理解できない。いや、理解できているからこそ何も考えられない。

田の前がぐらついた。立つていることも辛い。

少年は田を瞑り、唇を噛む。それから一度大きく深呼吸した。

それで落ち着けたわけではない。この場面で落ち着けるわけがない。

い。

だけど やることはわかつた。

もう一度、先ほどよりも大きく深呼吸をした。

そして

血が滴る剣を振り上げる。

目を見開き、奥歯を噛み締め。

少女に振り下ろした。

Hピローグ

少年は考える。

もう一度、この少女に会つて何か変わつただろうか、と。
判らない。

何も判らない。

この、胸をつく辛さも意味がわからない。

怪我もしていないので、なぜ胸が痛むかもわからない。

先ほどから止まらない涙の理由もわからない。

だめだ、何もわからない。

心はもう、ぐちゃぐちゃで何の形も示してはくれない。

ただ辛い。

辛すぎて、何も考えたくなかつた。

だから少年は、もう一度剣を振り上げる。

そこで少年は気づいた。

ああ、一つだけ判つたことがあつた、ヒ。

それは 神などいない といつこと。

少年を嘲笑をうかべる。

すべてをあざ笑い、侮蔑し、この世界そのものを見下すよつと。

そして 自身に剣を振り下ろした。

剣が少年を貫ぬく。

重い衝撃が、少年の胸に響いた。

立つていられず、少女に重なるよつて倒れこむ。

とても寒い。意識が、遠のいていく。

少年はおぼろげとなる意識なかで一言、少女に向けて呟いた。

「ごめん、ヒ。

今わの際、少年と少女はワラシティタ

(後書き)

以前考えた小説の世界観を基とした短編です。

暗い世界観でアホな主人公が頑張る、という話でしたが、アホな主人公が居ないとどうなるだろうか？ と考えた結果がこの短編でした。

やはり、場を明るくしてくれるキャラは大切ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8520z/>

罪と罰

2011年12月26日22時56分発行